

雜纂本『寂蓮集』生成の背景

中村 文

- 一 はじめに
- 二 春誓法橋をめぐる
- 三 寂蓮と園城寺
- 四 寂蓮と延暦寺
- 五 叡山の和歌活動
- 六 善峯寺という場所
- 七 おわりに

平安末期から鎌倉初期の歌壇で活躍した寂蓮の家集の内、雑纂本と呼ばれる系統の諸本には、春誓法橋が提供した歌稿を窓信僧都が書写したこと、また弘安四年には玄覚に依頼されて善峯寺の僧信宗がこれを書写した旨の奥書が付されている。小稿では奥書に見える僧名を手がかりとしながら、雑纂本『寂蓮集』がどのような「場」に支えられて、生成・伝播していったと想定できるのかについて考察した。春誓は残された詠作から、園城寺または延暦寺に属する僧であったと推定されるが、この両寺では当該時期に、歌合の催行や私撰集の編纂など、和歌活動が盛んに行われている。寂蓮の息公猷は園城寺僧で和歌事績も残る。また、延暦寺においても寂蓮は慈円やその周辺の僧と歌筵を共にしており、寂蓮の歌稿がこれら両寺院の僧によつて保持された可能性は十分考えられる。また、『寂蓮集』の書写に関わった善峯寺は、慈円やその法脈に繋がる寺院で、当時この寺に住した道玄には和歌事績が残る。書写を依頼した玄覚はその道玄の修法に参じた僧であった。以上により、雑纂本『寂蓮集』の生成・伝播には、天台僧が深く関与していたことが明らかである。

一 はじめに

平安末期から鎌倉初期に活動した寂蓮の家集には、自撰の所謂「寿永百首家集本」と、寂蓮没後に他撰された雑纂本の二系統がある。雑纂本系統の諸伝本の中では、高松宮旧蔵の一本が最も古い形態を残すと推定しうることにについては、すでに旧稿で述べた。⁽¹⁾『寂蓮集』伝本について詳細に検討した半田公平の呼び方に従って、本稿でも該本を高松宮A本と呼ぶが、これには次のような奥書が見える（改行は原態のまま。割注はへゝに入れゝで改行を示す）。

本云
春誓法橋
窓信僧都
供送之
以之書写也

（二行分空白）
建長五年十一月七日書写校合了

（二行分空白）
22ウ

弘安四年（辛巳）夏五月之比以大原野
禅尼本教人（善峯寺／信宗閣梨）書写了

（一行分空白）
同八月校合了
権律師玄覚

（以下空白）
22ウ
この奥書を、同じく高松宮旧蔵ながら、整備の進んだ本

文の状況から、A本よりも下った時代の成立と推定される
高松宮B本の奥書、

本云
春誓法橋本
定信僧都借進之以之書写之

（二行分空白）
本云
建長五年十一月七日書写校合歟

弘安四年夏五月之比次大原野禅尼本教
人（善峯寺／信宗日宗）書写之同八月校合之

（二行分空白）

本云
此寂蓮集自或方借出写了以外荒本也
他人哥多相交也以他本可改者也
権律師玄覚 26ウ

（以下空白）
27オ

と比較するならば、雑纂本『寂蓮集』の生成の過程について、A本奥書がより信頼すべき情報を我々に示していることは明らかだろう。

高松宮A本の奥書の最初の二行は、行に沿って上から下に読むのではなく、「春誓法橋供送之」「窓信僧都以之書写也」という上下二つのブロックから成ると見るのが妥当と思われる。すなわち、奥書の前半部は、春誓法橋の許から送られた歌稿を窓信僧都が書写し、さらにそれをなんぴとかが建長五年（一二五三）に転写したことを物語っている

のだろう。また、奥書後半部では、弘安四年（一二八一）に権律師玄覚が善峯寺の僧信宗阿闍梨に『寂蓮集』を書写させたことが記され、当集がどう伝播したのかの一つのケースを示しているよう。

雑纂本『寂蓮集』はB本の奥書末尾にも記されるごとく、重出歌や他歌人歌を含む未精選な集であり、寂蓮の没後に懷紙等の形で残されていた歌稿が誰人かの手で忽卒にまとめられたことを想定させるが、仮にそのような事情で雑纂本『寂蓮集』が成立したのであるとすれば、歌稿を密信僧都に「供送」つたとされる春誓法橋は、この集の生成を解明するための鍵となる人物と言えよう。春誓については、『勅撰作者部類』に「法橋。軒端肥後子」と見える他は、現在のところ記録・血脈等の資料にその名を見出せていないが、わずかながら残された手がかりを辿りつつ、寂蓮の家集がどのような「場」に支えられながら成立したのかを探ってみたい。また、奥書の後半部に見える「善峯寺」や「玄覚」等の地名・人名について検討し、奥書前半部とどのように関連するのかについても考察したい。なお、和歌の引用は特に断らない限り『新編 国歌大観』に拠った。また、論述の都合上、引用部に記号を付した箇所がある。

二 春誓法橋をめぐって

春誓はその出自や伝は未詳ながら、残された詠作から和歌活動をたどることができる。すでに先学に指摘があるが、春誓の和歌は、続後撰集以下の勅撰集に三首（続後撰・続拾遺・玉葉に各一首）入集する他、檜葉集・万代集・拾遺風体集・新三井集などから、計七首を集成できる。また、『代集』には「類聚題苑抄 春誓」と私撰集を編纂したことが記され、和歌に関心と力量を有した人物であったと知られる。春誓の詠作で特に注意されるのは、檜葉集に、

寂蓮法師のしはてずなりにける新撰深窓集えらび

つぐよしきこえければ、素俊法師、家集にそへて、
先祖二代の歌少おくりけるに、かきそへてかへしける
春誓法師

たま〔朽〕れのふかきまどにしかきとめつよよにいろ
そふ人のことのは
（九一六）

と見えることで、これにより、寂蓮が手がけながら終功しないままになった『新撰深窓集』という私撰集の編纂を、春誓が受け継いだことが知られる。寂蓮の死没によって撰集作業が継承されることがなったものだろうか。仮にそのような事情であったとしても、歌観というきわめて個人的な価値基準によってなされる打聞編纂の作業が寂蓮から春

誓に受け渡されている事実は、両者の間に和歌を媒介とする親密な交渉が存したことを示唆するものだろう。

春誓の作として『歌枕名寄』に入る^⑤、

松しまや心あるあまのはまびさし波ののきばにちどり
なくなり
(七二四四)

が『寂蓮無題百首』の詠、

いかばかりころあるあまのながむらんちどりなくな
りまつがうらしま
(五九)

と、措辞や歌材が酷似していることなども、両者の和歌上の関わりを証しているよう。春誓は寂蓮の歌稿がその手許に残されるに十分な必然性を持った人物であると言える。

春誓に先祖と自分の家集を送った素俊は、生没年未詳ながら、その編にかかる『檣葉集』は嘉禎三年(一二三七)に成り、同じ頃に成立した『新勅撰集』にも一首入集している^⑥。また、春誓が寂蓮から引き継いだ『新撰深窓集』は散佚したものの、『夫木抄』に「新深窓」と集名の注される和歌がその入集歌と見られ、その集付を持つ歌には、建保五年(一二一七)九月の右大臣道家家歌合での詠(五七六一、信実)や承久二年(一二二〇)頃成立の道助法親王家五十首の作(二四四〇、知家)が含まれることから、『新撰深窓集』はおおよそ一二二〇年〜一二三〇年の交に成立したのではないかと推定される。先に見た素俊の活動

時期を勘案すると、春誓の和歌をめぐる活動はこの前後になされたと見てよからう。雑纂本『寂蓮集』の奥書で書写年次として明確に示されるのは建長五年(一二五三)であるが、それに先だって春誓の送った歌稿を窓信が書写した時期は、春誓の和歌活動が『新撰深窓集』の編纂によって跡づけられる一二二〇〜三〇年代だったのではないだろうか。すなわち、雑纂本『寂蓮集』の現初的な形が成立したのは、寂蓮が没した建仁二年(一二〇二)から二十年ほどの間のことだったと推定されるのである。

それでは、春誓はどの宗派に属する僧だったのだろうか。次の二首は春誓の所属寺院を検討するための手がかりを与えてくれる。

A 同歌の中に

法橋春誓

唐のまだ見ぬ雲のはてまでも心をさそふよはの月かな
(新三井集・秋上二二四、万代集二九四二モ)

B 日吉社に三十首歌たてまつりける中に 法橋春誓

うつしおく法のみ山をまもるとてふもとにやどる神と
こそきけ
(玉葉集・神祇・二七八七)

A歌が入る『新三井集』は、「園城寺(三井寺)」を中心とした私撰集^⑧であることが有吉保によって明らかにされている。詞書に「同歌の中に」とあるが、A歌の前に置かれるのは観楓に三井寺へと赴いた藤原定頼と恒久阿闍梨と

の贈答歌であり、A歌の前には何らかの脱落があったと推測される。したがって、A歌の詠作事情は不明とせざるをえないが、この一首により春誓が園城寺と何らかの関わりを有していたことは確認できる。

次にB歌だが、これが日吉社に奉納された三十首歌の詠であり、また後に触れる叡山僧隆寛が詠んだ「うつしおく鷺のみ山のふかき跡も御法のみちをしる人のため」（拾玉集五七〇七）と表現が類似することは、春誓が延暦寺の僧であった可能性を示唆している。

春誓の名は記録や血脈類に見出せず、その所属寺院を園城寺、延暦寺のいずれと見ても蓋然性の指摘に留まるが、それを想定してみることによって、雑纂本『寂蓮集』がどのような歌壇的狀況を背景に生成してきたかについて、具体的に検討してみることが初めて可能になるのではないだろうか。この観点から以下では、A春誓が園城寺僧であった場合と、B延暦寺僧であった場合の二つのケースを想定し、それぞれの仮定に沿いつつ、雑纂本『寂蓮集』の成立がどのような事情・状況と関わるかについて考察してみたい。

三 寂蓮と園城寺

『新三井集』には寂蓮と園城寺の関係を示す詠作が収め

られている。すでに有吉保による指摘があるが、^⑨

出家の後、三井寺にすみ侍りける比、人人歌よみ侍りけるに 沙弥寂蓮

けふもまたいく山本をすぎぬらむ霞の奥に花を尋ねて

（春上・四七）

の一首により、出家後の寂蓮が園城寺に身を寄せていたことが知られる。詞書から出家して間もない時期のことと想察されるが、ここで寂蓮が共に詠歌している「人々」とは園城寺の僧たちではあるまいか。寂蓮の出家は承安二年（一一七二）頃と考えられているが、^⑩園城寺では承安三年八月十五夜に三井寺新羅社歌合が催され、また、「山家歌合三井寺」として本文が伝存する歌合や、『夫木抄』に「新羅社歌合」の詞書で詠が収められる催しも、作者の重複状況から見てこれと大きく隔たらない時期に張行されたものと推測される。これらの歌合はそれぞれ俊成・観蓮（教長）・清輔を判者として迎え、「山家歌合三井寺」では俗人の藤原親盛も加わるなど、承安頃の園城寺で和歌行事が盛行していたことをうかがわせる。また、三井寺新羅社・山家の両歌合に出詠した賢辰という僧が『和歌色葉』『代集』等に「三井集」という打聞の編者であると記されることは早くから知られていたが、近時、宇治の三室戸寺から『新三井集』の一伝本が発見され、その序に賢辰阿闍梨が安元

の頃に『三井集』を編纂、元久の交には猷円法印¹²が打聞を編んだことが記されている由を、大谷俊太が報告している¹³。寂蓮が身を寄せた当時、園城寺で和歌愛好の風潮が高まっていたことは明らかで、出家以前にすでに顕著な和歌活動を展開していた寂蓮を園城寺僧が迎え入れ、共に歌筵を囲むような事態が発生したであろうことも容易に想像される。園城寺には寂蓮を出家者としてのみならず、歌人としても受け容れる素地が熟していたのである。

寂蓮と園城寺を結ぶもう一つの要素は、寂蓮の男公猷が園城寺僧であったことである。園城寺文書編纂委員会編『園城寺文書 第七巻 教学・教義』（園城寺、二〇〇四年）所載の『伝法灌頂血脉譜』には、公胤前僧正が灌頂を授けた二十三名中の一人として、公猷の名が左のように記される¹⁴。

猷足房 （元久元）
同―五―三

同 （唐題）
所八人

公猷 年卅一

中務少輔藤定長子 寂蓮 貞永二―二―廿卒

この記事によれば、公猷は元久元年（一二〇四）に三十一歳で灌頂を受けているので、逆算すると承安四年（一一七四）生となり、貞永二年（天福元年、一二三三）に六十歳で没したと知られる。

この公猷は『新古今集』以下に四首入る（新勅撰集・続

後撰集・続拾遺集に各一首）勅撰歌人だが、『万代集』『雲葉集』等の私撰集にも歌が残り、全十首の歌を集成しうる。新古今集に入集することから、元久二年以前に詠歌を始めていたことは確かだが、承元三年（一二〇九）には長尾社歌合に出詠している（夫木抄・一六六八）。同歌合の作は『夫木抄』に二十首が残され、顕昭（夫木抄歌番号一二一九二）、定家（一二二四）らの出詠が知られるが、寂蓮の輩であったとも言われる家隆¹⁵（二六四七）や、猷円（一六五一）・宗円（二四九九）ら園城寺僧の参加していることが注意される。

次いで、翌承元四年十月には園城寺新羅社祭に付随して行われた歌会に参じたことが、『新三井集』に入る、

（承元四年新羅祭あくる朝に、有家卿序者にて人人
二首講じ侍りけるに、社頭の菊を） 権律師公猷
葛の葉も秋にはあへぬ神垣にうつろひのこるしら菊の
花 （二八六）

（承元四年十月新羅社祭の明朝、おなじ社にて月卿
雲客おのおの二首歌講じけるに、薄暮時雨と云ふ
事を） 権律師公猷

時雨行くみねのよこ雲たえだえに村ぎえわたるまきの
夕霜 （三一二）

の二首によって知られる。同会での詠は『新三井集』二七

九〇二八六、および三〇七〇三一二に収載されており、為家・家長・雅経・保季らの歌人の参加が確認できる。『園城寺伝記』十には「承元四年十月十八日、被行新羅祭礼於明王院」とこの日の祭礼について記録があり、道普・顕円らの僧名が見えるが、歌会にはこの顕円や長尾社歌合でも同座した宗円、また明王院の童であつたと覺しい家隆の男万歳丸が出詠している。宗円は若年であつた平安末期から歌会を開催するなどの活動が認められる僧で、公猷の和歌活動はこうした和歌を愛好する園城寺僧に導かれながら展開した可能性が考えられよう。

だが、公猷の和歌活動は園城寺の内部のみに留まらない。元仁二年（嘉禄元年、一二二五）三月には権大納言基家が主催した三十首歌会に加わったことが、左の歌から知られる。

（前内大臣家卅首歌に、江上暮春） 権律師公猷

なにはえのかすみにしづむみをつくしくれゆくはるの
あとだにもなし

（雲葉集二七五）

公猷はこの三十首歌を提出するに際し、血縁者である定家の許に歌稿を送って良否の判断を請い、「今度宜之由」を示されたものの、さらに重ねて問い尋ねるために定家の許を訪れている（明月記・同年三月二十八日条）。また、公猷は寛喜元年（一二二九）には為家の企画した百首歌に参

加し、同四年にそこから撰歌・結番され日吉社に奉納された撰歌合に一首を残している。こうした事績は、園城寺域外における公猷の和歌活動が、定家や為家らの血縁者に誘われて成ったことを推測させるが、一方で右に挙げた和歌行事すべてに家隆が関わっていることにも注意しておきたい。家隆が寂蓮の聲であつたかどうかは不明とするしかないが、両者が和歌を介して密接に結びついていたことについては、安井重雄に詳しい論攻がある。⁽¹⁶⁾ 基家で催された初期の和歌行事に家隆が深く関与していたことは黒田彰子が述べる通りで、⁽¹⁷⁾ これらを勘案するならば、公猷の公的な和歌の場への参入を、寂蓮との係累深い家隆が導いた可能性は十分に考えられる。

以上のごとく、公猷は鎌倉前期の歌壇において枢要な歌人との繋がりを保ちつつ和歌活動を展開し、一定の評価を得ていたと判断されるのであり、その手許に父寂蓮の歌稿が残されていたと見ることは、きわめて自然な想定と言える。寛喜四年までの和歌事績が確認できる公猷は、春誓と活動時期が重なり合う。仮に春誓が園城寺の僧であつたとするならば、公猷を通して歌稿を入手することは大いにあり得たであろう。雑纂本『寂蓮集』の原初的な生成の場として、まず園城寺を想定してみた所以である。

四 寂蓮と延暦寺

次に春誓が延暦寺僧であった場合について考えてみよう。このように仮定するためには、まず、『新三井集』に叡山僧の詠が含まれていることを確認しておく必要がある。

『新三井集』には例えば、

C 正応六年九月十三夜に、ひろさはにて百首続歌な

ど侍りけるに

天台座主前大僧正道玄

いまよりはひろさはの池に月は見むほかよりも猶ころすみにける

(新三井集二五四)

D 前大僧正仙朝探題百首歌よみ侍りけるに、秋思

法眼源承

片岡のまくずが露を涙にて恨はたへず鹿ぞ鳴くなる

(新三井集二〇六)

のように、叡山僧の作が見出せる。C歌の作者道玄については後に触れるが、二条良実の男で第八十八代天台座主となった人物、D歌の作者源承は藤原為家男の叡山僧で歌人として著名である。D歌詞書に見える仙朝は園城寺別当を勤めた人物で、当該歌は叡山・三井両寺の僧の間に和歌を介した交流の存したことを物語る点でも興味深い。

さて、春誓が延暦寺僧であったとするならば、雑纂本『寂蓮集』成立の背景としてどういった状況が考えられる

だろうか。寂蓮は叔父で天台座主となった快修や、養父俊成の息静快など、血縁者にも延暦寺僧が居るが、寂蓮と叡山をもつとも強く結びつけていたのは慈円との交流ではなかっただろうか。寂蓮と慈円が、文治三年(一一八七)に兼実給題の結題百首を共に詠んだのを初めとして、同五年を中心に極めて親しく交流したことについては、山本一による詳しい考証があるが、雑纂本『寂蓮集』に見える、

E 舍利報恩講、雪中聞法

わしの山名残をあとのしるべにて雪ふみわくる法の庭人

(八六、『私家集大成』による)⁽²⁰⁾

の歌は、慈円との交渉が建久期以後も続いていたことを証している。

舍利報恩講は、『門葉記』勤行六「舍利報恩講」に、「建久六年十二月十四日始行／建暦二年十二月七日為勅会へ上卿院司随事。毎年例事也」慈鎮和尚入滅之後。止御願之儀以十二月二十五日為式日」と見えて、建久六年(一一九五)に慈円が開始した法会と知られる。この初めての舍利報恩講に列席した藤原長兼の日記『三長記』の同年十二月十四日条には、

今日於座主御房、被修舍利報恩会、殿下、^(兼実)太政大臣、^(良修)内相府、各有渡御、有童舞、入夜披講詩歌、^(兼実)詩題皆令入仏道、成信為序者、歌題雪中聞法、予献序

と、舍利報恩講に付随して詩歌会が行われ、その歌題は「雪中聞法」であつたことが記されており、E歌はこの折に詠まれたものと判明する。なお、この会には藤原公時も参加して和歌を詠じている。⁽²²⁾ また、雑纂本『寂蓮集』には、「報恩講」をめぐる詠作がもう一首、左のごとく収められている。

F 座主御房報恩講

同大乘院景氣重山はまくらの下水海はふもとなり
月きよみ波のちさとをかたしきて枕のそこは有明の空

(高松宮A本による)⁽²³⁾

右歌の詠作年次は不明だが、寂蓮と慈円が建久期にも仏教・和歌の双方を紐帯とする交遊を重ねていたことは明らかであろう。

ところで、寂蓮が和歌を介して交流した叡山僧は、慈円に限定されるものではなかったようだ。拾玉集五一五二・五一五三に見える、

G 寂蓮入道、昔おもふいけにはる井もくちはてて枯

野につづくあしのうら風、と古池寒蘆によみたり、
とかたりし朝に雪ふりしかば、よみてつかはす
昨日ききし枯野のかぜを身にしめてけふの心は雪にむ
もれぬ

返し

寂蓮

あはれしるこころを雪にむすばずはかれのの末に色を見ましや⁽²⁵⁾

の贈答は、慈円と寂蓮の風雅な交流を物語るが、五一五二番詞書に見える寂蓮歌が拾玉集四一五八〜四一六〇に見える、

H 北野会三首静賢法印にかはりて社頭冬月

ひとよとてとしふりにけり松がえに霜おきそふる冬の
よの月

古池寒蘆

あしもなほ霜がれてこそさるさはの池におひたる草と
見えけれ

聞詞増窓

ことのはに色をそへつるけしきかないとど涙の時雨れ
せよとや

と同じく、おそらく文治五年に張行された北野会に提出された詠作と推定しうることについては、すでに山本一に指摘がある。⁽²⁶⁾ 寂蓮が慈円の加わらない歌会で、これも叡山僧である静賢と同座したことを示すこの事績は、寂蓮の延暦寺をめぐる詠歌の「場合」を考える上で重要だが、ここではこの歌筵が北野社で開催されたことに注目しておきたい。

北野社の別当は平安中期以来、叡山の管轄下にあり、曼殊院門跡・寺務宮として、その別当は叡山僧により相承さ

れてきた。平安末期から鎌倉初期にかけての時期に北野社別当であったのは平親範男の仙範で、長寛二年（一一六三）に補され、建久二年（一一九二）に承信（高階泰経男）がこれを嗣いだことが、「北野別当曼殊院門跡歴代次第」によつて知られる。仙範は北野別当の地位を権少僧都・円仙から譲られ（『門葉記』雑決三「曼殊院 北野別当相承之」、また東寺観智院金剛蔵の『天台血脈』によれば惠渚の資であるが、注目すべきは『華頂要略』門下傳脇門跡第六の「仙範少僧都」の項に、「同（建久）四年正月八日 慈鎮和尚召具伴僧」と記されていることである。仙範と慈円が密接であったことは、拾玉集五四三七番歌詞書に建久五年九月頃の出来事として、「又仙範僧都もはなくなりなどして、無常のかなしみいつよりも思ひしられたり」と記されることからうかがわれる。ちなみに、仙範の跡を嗣いだ承信についても『華頂要略』は「奉仕慈鎮和尚」と注している。前掲G・Hに見える北野会が催された時期の北野社は、慈円に深く関わりを持つ場であったと推測されるのである。

Hの三首の作者として北野会に参じた静賢は通憲入道信西男の叡山僧で、拾玉集には特に建久初年頃の贈答が多く残り、両者の風雅な交流をうかがいうる。寂蓮も静賢も、慈円との交渉を機縁として和歌活動の場を次第に拡大し、

叡山僧の関与する北野社での歌会に参入したといった事情であったかと推察される。同時代の園城寺に寂蓮を僧としてのみならず歌人としても受容する素地の存したことに就いては先に述べたが、この北野社歌会は叡山においても寂蓮を歌人として受け止める環境が、慈円一人に留まることなく広く準備されていたことを示すものであろう。

五 叡山の和歌活動

延暦寺における和歌活動は、鎌倉初頭に慈円が出て急速に展開したわけではなかった。平安末期の承安元年（一一七一）八月には當時法印であった全玄が歌会を催している。夫木抄にはその詠作が判詞を含めた形で八首残り、判者に清輔を招き、花・郭公・月・雪の四題が設題され、顯昭・全真・寛玄・玄有を作者とする歌合であったと知られる。

全玄自身の詠作は、師で第四十八代天台座主であった行玄の入滅をめぐる一首しか残らないが（月詣集九六六、風雅集一九七〇）、その主催にかかる歌合は、正統的な設題からも、当代の斯界の権威清輔を判者とする点からも、堂々たる和歌行事であったと言つてよからう。

全玄は元暦元年（一一八四）二月に第五十九代天台座主となった人物で（天台座主次第）、慈円は覺快法親王（鳥羽院第七皇子）に入室したものの、灌頂は覺快没の翌寿永

元年（一一八二）にこの全玄から授けられた。この灌頂の次第を記した「受法之間雜日記」（『門葉記』灌頂一「和尚」）には、「讚衆」として「權少僧都全真」^{（本増）}「阿闍梨寬玄」^{（30）}の名が見える。

寬玄は同時代の私撰集である月詣集（二首）と言葉集（一首）に作を残すが、特に言葉集に見える、

ひえの山にて、ほたるを名所によせて、人人よみ
侍りけるに

なにはえのあしのしたばのほたるこそこのたまとは
いふべかりけれ

（二六九）

は、叡山における和歌盛行の一端をうかがわせる。また、全真は平清盛室時子の甥で清盛の猶子となり、平家と共に都落して壇ノ浦で捕らえられ流罪になった人物で、玉葉集には配所での全真の詠（旅・一一三一）や、帰京後、建礼門院を大原に訪ねた際の詠（雜四・二四一五）が入る。還京後の正治二年にも石清水若宮歌合に出詠しているが、承安二年に顕昭が結構した法輪寺歌合に出詠し（夫木抄一七二六）^{（32）}、月詣集（二首）・言葉集（三首）にも詠が採られていて、平安末期に和歌活動を展開し一定の評価も得ていたと判断できる。全真は『僧綱補任』寿永二年条に「少僧都。山。二位。桂林房、卅三。廿二」と記されるが、^{（33）}「桂林房」とは全玄が住した東塔北谷の房に因む名と思われ、

全真が全玄にとつて極めて近い僧であったことを重ねて確認しうる。

以上の事実から、全玄法印房歌合は全玄が周囲の身近な叡山僧を語らって張行した催しであったと推定できよう。

これに加えて、全玄と慈円が師弟関係にあり、全玄歌合の作者の僧たちが慈円と法会での面識を持つていること、また慈円は全玄からその住房である桂林院や雙林寺百光院を譲られていることなどを考え合わせると、叡山における和歌愛好の傾向は、詠歌の場となる房舎やその構成員の継承を通して、全玄から慈円へと受け継がれた面があったのではないかと想察される。平安末期以前の時点ですでに全真と交流のあった惟方が（粟田口別当入道集一七）、文治四年（一一八八）に慈円と隆寛が試みた十題百首の速詠に加わっていること（拾玉集五二〇一）なども、慈円の周辺に全玄ら前代の僧の和歌活動を受け継ぐ形で詠作の場が広がっていたことを示唆するように思われる。

ところで、この時期には延暦寺僧による打聞も編まれている、同寺における和歌愛好の高まりをうかがわせる。

『和歌色葉』「五 撰抄時代者 付私集口伝物語」に「經因（大和公）が山月集、覺審（侍從闍梨）が荊谿集、春花集^{（35）}」と見える経因と覺審は、千載集・雜上に、

述懷のころをよめる

覺審法師

すぎきにし四そぢの春のゆめのよはうきよりほかのおもひいでぞなき
(一〇二八)

経因法師

はかなしなうき身ながらもすぎぬべき此世をさへもしのびかぬらん
(二〇二九)

と並んで入集するが、この経因歌は月詣集八五九に「横河常行堂にて老僧共述懐心よみ侍りけるに」の詞書で入り、叡山における詠歌活動の実際を物語る。覚審は久寿二年(一一五五)十月二十三日に法性寺殿最勝金剛院で行われた撰閑家の法事に参じた題名僧中に、「覚審」と見える(兵範記)人物かと思われるが、『天台血脈』に政春の弟子として「覚審へ侍従阿々、律師」と記載される⁽³⁶⁾。政春は『天台血脈』によれば相実の弟子だが(紙数一五・一六)、相実は行玄の師である桂林院良祐にも教えを受けており(同・紙数一五)、前述した全玄らとも法脈上の繋がりが認められて興味深い。行玄を初代門跡とする青蓮院の吉水藏聖教の中に、「建久四年二月廿五日勘付了 點穴太戒光両／流合之諸会同點之但召不召等ハ少将阿闍梨點／本也 金剛佛子覚審」と記された典籍が残ることは、覚審の建久四年(一一九三)までの生存を示すと同時に、その法脈上の位置をも示唆しているだろう。

文治から建久期の寂蓮にとって、慈円とその周辺が一つ

の重要な詠歌の「場」であつたことは前節で見た通りである。それは、慈円との間に僧としても和歌の上でも密接な繋がりを持っていた隆寛の編と考えられる『玄玉集』に、寂蓮の歌が三十一首(集中第五位)採られていることにもうかがえよう。だが、和歌行事の主催こそ全玄―慈円に特に顕著であるとは言え、この法脈に連なる僧たちにもまた多様な和歌事績が認められる。仮に寂蓮の詠草類が叡山に残されたとしたならば、寂蓮と由縁の深い慈円個人の手許に保管されたという可能性ばかりでなく、叡山全体の活発な和歌行事を支え、寂蓮と歌筵を共にしたかもしれない無名の僧侶歌人たちの総体が受容し、これを受け伝えていった可能性をも考えてみる必要があろう。

六 善峯寺という場所

最後に、雑纂本『寂蓮集』奥書の後半部に関わって、当該本の伝播の一事情を検討してみたい。奥書後半部分を高松宮A本に従って要約すると、「弘安四年(一二二一)夏五月頃、権律師玄覚が善峯寺の信宗闍梨に大原野禪尼本を書写させ、同八月に校合した」という内容である。

善峯寺は現在も京都市西京区大原野小塩町、「西山」と呼ばれる地域に所在する天台宗の寺院で、恵心僧都源信の弟子源算の草創と伝える。その沿革については菊地勇次郎

の著書に詳しいが、³⁸⁾「叡山、就中青蓮院より移住した聖によつて復興され」た同寺（往生院）に、応保元年（一一六一）、観性が隠居した。西山法橋と呼ばれる観性は行玄を師主とする青蓮院流の僧で、慈円にとつては受法の師に当たる。慈円は平安最末から時おり善峯寺に赴いて聖教の書写等を行い（『青蓮院門跡吉水藏聖教目錄』第七三箱の一）、文治六年（一一九〇）二月には報恩講を行った（拾玉集四二四二）。また、『門葉記』門主行状一「慈鎮」に「和尚自筆御記云。五十三歳移住西山籠居。首尾五年」と見えるごとく、承元元年（一二〇七）四月から建暦二年（一二二二）十一月までを西山で送っている。すなわち、善峯寺は慈円と極めて関わりの深い寺院であつた。

建保四年（一二二六）、法然房源空の門下である証空が住持となり、浄土宗寺院の性格を帯びることとなつた後も、西山に青蓮院の伝統が保持されていたことは、前掲菊地著書に詳しい。慈円入室の瀉瓶の弟子であつた道覚（後鳥羽院皇子朝仁親王）は、承久の乱の影響により「籠居于西山善峯寺」し（『門葉記』門主行状一「西山宮〈道覚〉」、その道覚が受戒・受法の師となつた道玄（二条良実男）も、座主を辞した翌弘安二年（一二七九）に「籠居于西山」している（『門葉記』門主行状二「准后〈道玄／本名最尋〉」）。この二人は共に善峯寺において聖教を盛んに書写

しているが、例えば、「弘安二季極月廿九日／於善峯寺草之偏／守軌説聊加潤色而已／金剛仏子道」³⁹⁾の奥書を有する聖教が残ることは、雑纂本『寂蓮集』が書写された十三世紀末に至つても、善峯寺が天台寺院の性格を失つていなかったことを証しているよう。

では、書写した人物はどうであらうか。残念ながら「信宗闍梨」については現在知るところがない。書写を依頼した玄覚については、すでに久保田淳に詳しい考証があり、⁴⁰⁾ほぼそれに尽くされているが、久保田が「玄覚が天台宗に何等かの繋がり有し」たのではないかと推定したことについては、若干の補足を加えうる。『門葉記』勤行法九「水天法」に十樂院准后が弘安七年（一二八四）六月二十一日に始行した水天供の記事が見えるが、その「葉草喩品御読経著到」の二十一日子時・丑時など八箇所に「玄覚」の名が載り、この「著到」に前接して記される「葉草喩品不斷御読 結番」の子・丑の項には「大夫律師」と見える。年代も一致し、「律師」の僧位にも矛盾がないので、この人物を雑纂本『寂蓮集』を書させた玄覚と見てよいであろう。

ところで、右の水天供を修した「十樂院准后」とは先に触れた道玄のことで、『門葉記』門主行状二の道玄の項にも、「弘安七年六月二十一日。修水天供」と記されている。

道玄の行った修法で役割を勤めている玄覚は、当然、道玄との間に何らかの宗教上の繋がりを持つていたと推測される。道玄が弘安二年に善峯寺に籠居し、その二年後の弘安四年に同じ善峯寺の僧に玄覚が『寂蓮集』を写させているのは偶然であろうか。道玄の詠はすでに第四節冒頭に一首を掲げたが、父良実や兄教良、また為家らに勧めて「日吉社廿一首」を催し（新後撰集五七二他）、嘉元百首の作者となり、為氏や源兼氏らとも盛んに交流した歌人であった。『続古今集』以下の勅撰集に五十九首が入集し、『門葉記』門主行状二には「永仁二年四月二十一日。禁裏百首和歌詠進之」の記事が見え、家集の存したことも近時明らかにされている⁽⁴³⁾。

興味深いのは、続拾遺集・雑上に入る、

無動寺にすみ侍りけるに、前大僧正慈鎮、おほけなくうき世の民におほふかな我がたつそまのすみ染の袖、とよみて侍りけることを思ひいでてよみ侍りける 前大僧正道玄

祈りおきし末をぞたのむいにしへのあとには今もすみぞめのそで (一一四二)

の歌に、慈円を追慕する意識が認められることで、無動寺千日参籠を行ったことも併せて、道玄は慈円の跡を追おうとする意思を明確に持っていたのではないかと思われる⁽⁴⁴⁾。

続千載集・雑中に入る、

前大僧正道玄よませ侍りける歌に、曉述懷を

法印玄忠

つれなくて世に有明の月もみつただ我ばかりうき物はなし (一八六九)

は、道玄が僧たちを催して歌会を開いたことをうかがわせるが、和歌の面においても道玄は慈円の跡を追おうとしていたのではないだろうか。とするならば、『寂蓮集』が書写された時期の善峯寺には、玄覚一人の志向に留まらず、寺全体に和歌愛好の気風が浸透していたとも考えられよう。

七 おわりに

以上、雑纂本『寂蓮集』の奥書を手がかりに、『寂蓮集』の生成と伝播の背景としてどのような場を想定しうるかを考えてみた。奥書解説のキーとなる「春誓法橋」が全く記録上に見出せないゆえに、論は推測を重ね迂遠になったが、平安末から鎌倉中期にかけて、園城寺でも延暦寺でも天台僧の和歌活動がきわめて活発に展開していたことが明らかになった。歌会開催や撰集編纂等の和歌をめぐる活動を支えた人や場の、文芸を愛好する風潮の厚みのある総体こそが、寂蓮の歌稿を保持し、家集を成り立たせ、また伝播に寄与したと推測することは許されるだろう。また、寂蓮の

家集の成立に天台僧が深く関与しているとの想定は、「御子左家の一員」と見なされがちな寂蓮観に見直しを求めもするだろう。

久保田淳は雑纂本『寂蓮集』書写に関わった玄覚について、歌人としての始発段階で反御子左家的な歌筵に加わっていたことを指摘している。一方、寂蓮の歌稿の保持に関わったかもしれない公猷は、知家や信実と歌筵を共にし、また『寂蓮集』の原初段階に関与したらしい春誓は、その打聞『新撰深窓集』に知家や信実の詠を採っている。雑纂本『寂蓮集』の閲歴には「反御子左家」的な色彩が常に見え隠れするが、これが相互に結び付いて意味をなすものなのか否かについては、さらに検討して、寂蓮の歌界における位置や歌人としての性格を考える材料としたい。

〈付記〉本稿は、二〇〇九年六月六日に佛教大学で開催された平成二十一年度仏教文学大会において、「雑纂本『寂蓮集』生成の周辺」と題して行った口頭発表を元に増補したものである。席上、御教示を賜った、黒田彰子・高城功夫・安井重雄の諸氏に深く感謝申し上げます。

(1) 中村文「高松宮旧蔵『寂蓮集』をめぐる――雑纂本『寂蓮集』の成り立ちと性格――」（埼玉学園大学紀要 人間学部 篇）8、二〇〇八年十二月。高松宮A本は現在 国立歴史

民俗博物館に「高松宮家伝来禁裏本」として蔵される（資料番号H一六〇〇―五五〇）。

(2) 半田公平『寂蓮法師全歌集とその研究』（笠間書院、一九七五年）。

(3) 半田公平『寂蓮研究―家集と私撰和歌集―』第一章第二節に（新典社、二〇〇六年）詳しい。

(4) 春誓の和歌事績については、注2半田著書、安井久善『改訂中世私撰和歌集攷』（三崎堂書店、一九五一年）に言及がある。

(5) 「歌枕名寄」では「秋風 浜庇 千鳥」と注されるが、現存の『秋風集』『秋風抄』には当該歌が収載されていない。なお、「心ある海士」の措辞は、寂蓮の用例と相前後する時期に、良経（秋篠月清集・六二、花月百首）や家隆（壬二集・二八九、殷富門院大輔百首）が用いているが、「千鳥」と取り合わせた作は寂蓮歌のみである。

(6) 安井久善「素覚、素俊法師攷」（注4安井著書所収）は、素俊を素覚の子と考え、檜葉集編纂時には七、八十歳であったろうと推定している。

(7) 安井久善「夫木抄にみえたる散佚撰集について」（注4安井著書所収）にも「新撰深窓集」所収歌について言及がある。

(8) 有吉保「新三井和歌集」の考察―収載の新資料について―」（『和歌文学とその周辺』桜楓社、一九八四年、同「新三井和歌集」解題（『新編 国歌大観』第六巻、角川書店、一九八八年）。

(9) 注8の有吉論文。息の園城寺僧公猷についても指摘がある。

(10) 久曾神昇「顕昭・寂蓮」（三省堂、一九四二年）。

(11) これらの歌合は『平安朝歌合大成（増補新訂）』に、「三九

三 承安三年八月十五日三井寺新羅社歌合、「四三〇（治承四年五月以前）三井寺山家歌合」として歌合本文が収められ、『夫木抄』に「新羅社歌合」の詞書で載る詠作は、「四〇八（安元三年六月以前）三井寺新羅社歌合」として集成されている。

- (12) 猷円は隆信男の園城寺僧。応保元年（一一六一）生、貞永元年（一一三二）に七十二歳で没。『新古今集』に一首入集、以下の勅撰集に四首入り、計七首の詠作を集成しうる。井上宗雄『鎌倉時代歌人伝の研究』第二章（風間書房、一九九七年）参照。

- (13) 三室戸寺蔵『新三井和歌集』の出現に関する大谷俊太氏の発言は、二〇〇九年七月十八日に開催された和歌文学会七月例会において、丸山陽子「三井寺周辺の和歌活動―『新三井和歌集』の成立と性格より―」の研究発表に対する質疑の場とされた。その後、序文に賢辰・猷円による打聞編纂とその具体的な成立年号が記されている旨の御教示を賜った。ここに記して、大谷氏の御厚情に謝意を表したい。

- (14) 東京大学史料編纂所に蔵される「園城寺伝法血脈」（請求番号二二一六―四、謄写本）は、「園城寺文書 第七巻」所載の芝野康之「『伝法灌頂血脈譜』について」によれば、同書所収の『伝法灌頂血脈譜』とは別の典籍のようであるが、公猷に関しては全く同一の記事を載せている。

- (15) 『古今著聞集』『井蛙抄』。

- (16) 安井重雄『藤原俊成 判詞と歌語の研究』I「寂蓮をめぐる問題」（笠間書院、二〇〇六年）。

- (17) 黒田彰子『中世和歌論攷 和歌と説話と』IV―1「基家の初期―雲葉集編纂までの活動―」（和泉書院、一九九七年）。

- (18) 『尊卑分脈』第三卷五六四頁。「伝法灌頂血脈譜」（注14）には「美濃権守宗光子 小一条院末」と見え、弘安元年（一二七八）十二月十四日に七十七歳で没したと知られる。

- (19) 山本一『慈円の和歌と思想』第四章「歌歴の問題（一）―文治五年前後―」（和泉書院、一九九九年）。

- (20) 当該箇所は高松宮A本では、「舍利報恩講雨中聞法／わしの山なこりを跡のしるへにてゆきふみ分る法のはひと」となっている。

- (21) 『門葉記』門主行状「慈鎮」にも同様の記事がある。

- (22) 田中登によって紹介された藤原公時集の断簡に「慈円僧正報恩講雪中聞法」の詞書で取められる作は、この折の詠である。田中登「千載集歌人藤原公時の作歌活動とその家集」（『古筆切の国文学的研究』風間書房、一九九七年）参照。

- (23) 『私家集大成』所収「寂蓮II」の二四五番歌の次に該当する位置にある。「私家集大成」「II寂蓮」では同じ歌が九四番に入る。『新編 国歌大観』では二〇六番に見える。なお、同歌は寂蓮集から夫木抄・一六二七四に採られている。

- (24) 拾玉集・四二三九には建久二年十二月二十日に「報恩舍利講」を行い、種々の法案に付随して詠歌のあつたことが記される。この報恩舍利講がE歌の詠まれた「舍利報恩講」とどのような関係になるのかは不明だが、建久二年の折に設題された「山家冬月」題は（拾玉集四二四〇）、Fの寂蓮歌の内容に合致する歌題と言えよう。

- (25) 五一五二番詞書に見える寂蓮歌は、寂蓮の家集には収められず、玄玉集七二五に入る。

- (26) 注19山本著書。

- (27) 竹内秀雄『天満宮』（吉川弘文館、一九六八年）巻末に付

載。

- (28) 宇都宮啓吾「東寺観智院金剛藏『天台血脈』について―付・影印」(『大谷女子大学紀要』38、二〇〇四年二月)。仙範の名は紙数番号二三に「仙範〈阿ゝゝ、法□法眼／少僧都北野別当〉」と記される。また、同書の紙数三二には静然の弟子として仙範の名が見える。東京大学史料編纂所蔵『台密血脈譜』(請求番号二〇一六四二四、謄写本をマイクロフィルムにて閲覧)にも、恵渕の弟子(マイクロフィルム番号八三／一四二)、および静然に灌頂を受けた十七人の中に仙範の名が記載される(マイクロフィルム番号八二／一四二)。
- (29) 『平安朝歌合大成(増補新訂)』に「三八五 承安元年八月十三日全玄法印歌合雜載」として詠作が集成されている。
- (30) 『門葉記』勤行法には、正治二年(一一〇〇)八月十九日に始められた御座御祈の中に「天神供〈玄有、院庁〉」と玄有の名が見える。全玄房歌合の作者玄有と時代的には矛盾しないが、慈円との関係等については明らかにしない。なお、全玄法印房歌合の作者として現在判明している四名のうち、玄有にだけは他の和歌事績が見出せない。
- (31) 新古今集・雑下(二七八五)には配流中の全真に送った承仁法親王の詠が入る。
- (32) 『類題鈔』に「法輪寺歌合〈頭昭結構〉」と記される(『類題鈔』研究会編『類題鈔(明題抄) 影印と翻刻』笠間書院、一九九四年、歌合番号三六二)。
- (33) 平林盛得・小池一行編『五十音引僧綱補任僧歴綜覧 増訂版』(笠間書院、二〇〇八年十月)。
- (34) 『門葉記』門主行状「慈鎮和尚」に「同年(文治五年)七月十二日。全玄大僧正以桂林院奉讓之」と見える。また、
- 『華頂要略』「山上御本坊竝御管領所」には「百光院〈在東山雙林寺〉全玄大僧正御住房也。其後慈鎮和尚御伝領。北谷桂林院里坊歟」と記される。
- (35) 『代集』にも同様の記事があるが、『代集』では「荆谿春花集」を一本とし、『山月集』に「経因撰。ひえの山の歌ばかり也」と注す。
- (36) 『天台血脈』については注28参照。覚審の名は紙数(二二六)の左端に記され、その下に「清範〈阿ゝゝ〉以下十一名の弟子の名が記されている。
- (37) 吉水藏聖教調査團編『青蓮院門跡吉水藏聖教目録』(汲古書院、一九九九年)、「木箱二」一八「胎記〈供養會〉」。
- (38) 菊地勇次郎『源空とその門下』、特に「西山義の成立」の章(法蔵館、一九八五年)。
- (39) 『異』(注37著書、六三箱の一)、「相神共在報」(第八三箱の六)等。
- (40) 『北教令』(注37著書に「道玄筆」と認定する。第九四箱の四)。なお、同書に見える『木』(第九五箱の三)という聖教には、治承二年に観性が西山往生院で注した旨の奥書に延応二年道覚の判が加えられ、さらにそれを延慶三年(一一三一〇)に行仁親王が善峯寺で書写した旨の朱書があつて、青蓮院の教学が十四世紀初頭まで継がれていたことを確認しうる。
- (41) 『門葉記』勤行法六「六字河臨法」には、文応元年(一二六〇)七月に龜山仙洞で当該法が修せられた折の「行事僧」として「法眼信宗」の名が、同じく「除目歳末御修法」には、建長五年(一二五三)十二月に関白家で当該法が修せられた折の「行事僧」として「信宗法眼」の名が記されている。いずれも浄土寺僧正慈禅に付したもののだが、建長年間にすでに

法眼である僧を、弘安年間に「阿闍梨」と呼ぶことは不審なので、『寂蓮集』奥書に見える「信宗」と同一人と同定することは控えておく。

- (42) 久保田淳「権律師玄覚」(『中世和歌史の研究』明治書院、一九九三年)。

- (43) 徳植俊之「『国栖切』考」(久保木哲夫編『古筆と和歌』笠間書院、二〇〇八年)。道玄の和歌活動についてもまとめられている。

- (44) 弘長三年(一二六三)十二月晦日に「無動寺千日入堂始之」(『門葉記』門主行状二)。

- (45) 新後撰集・釈教に「文永七年冬の比、内裏にて寒の御祈のために如法仏眼法修し侍りける時、雪のふりて侍りければ、承元のむかしのあとをおもひて奏せさせ侍りける」の詞書で入る詠も(六三七)、慈円が承元五年(一一二一)正月二十五日に水無瀬殿蓮華寿院で修した如法仏眼法を意識しているのだろう。なお、道玄の禁中における如法仏眼法修法は文永七年十月二十日(『門葉記』門主行状二)。